

日本文化

我々が此處に生れ、^{此處に}働^{此處に}き、死^{此處に}んで行く、^此その歴史的現実の世界
 は、論理的には多と一との矛盾的自己同一と云ふべきものでなければならぬ。私は多年の思索の結果、斯く考へように至
 つたのである。^{哲学的論文集第三}絶対矛盾的自己同一。世界
 と^は我々の^は無数なる物の集合と考へよう、無数なる物
 件物の合成として決定せられた一つの形と考へよう。併
 し現実の世界と云ふのは、何處までも物と物とが相働く世
 界でなければならぬ。唯一的に決定せられた^此現実の
 世界の形と云ふのは、無数なる物と物との相働^此きと云ふ

二
三行

~~相働~~
~~き~~
~~と~~
~~云~~
~~ふ~~

日本文化

過去無限からの相互限定の結果として、即ち相働くこととして
 て決定せしむるたものでなければならぬ。而して物と物と
 は此現実の働きのである。我々は此歴史的現実の世界か
 ら生れ、~~死~~ ^{此処} 働き、~~死~~ ^{此処} 死に行くのである。物と物とが相
 働くこととして一つの結果を生ずると云ふことは、多
 一となることではなけれはならぬ。物と物とが相働と云ふ
 ことは、物と物とは何処までも相對立するものではない。な
 らない。併し單に無関係に相對立するもの間の間は、働くと
 云ふこともない。働くと云ふことは、何等かの関係に入らな
 ければならぬ。何等かの関係に入ると云ふことは、両者が共通

四三三三

日本文化

なものがなければならぬ、両者はそれにて一でなければ
 ばならない。例へば、物体と物体とが空間にて相働くは
 其は、物体は空間的でない。併し多が一とな
 ると云ふことは、多が否定せらるることではない。な
 い。對立がなくならぬこと、働くと云ふことがなくならぬこと
 なければならぬ。物と物とが相働くと云ふのは、物と物と
 が何処までも相對立し相否定し合ふことと考へらる。甲
 が乙を變じ乙が甲を變ずることと考へらる。併し右に云
 った如く、二つのものが相關係する^{上は}は、兩者の共通なも
 のがなければならぬ。甲が乙を變定するとか、變ずると

西田三樹

日本文化

変ずると云ふことは考へる水ない。そのかぎり、その水は存在
 せぬが如く、働くと云ふことが存在なくなることでなけ
 ればならない。一は何処までも多の一であり、多は何処まで
 も一が多になければならない。多と一との矛盾的自己同一
 として現実の世界が考へられると云ふ所以である。我々は
 此世界を空間的・時間的と考へる。空間的と云ふのは、無数の
 物と物とが何処までも並列的に相對立することである。
 時間的と云ふことは、對立する物と物とが一つとなつて行
 くことである。時とは何処までも相對立するものの統一の
 形式でなればならない。普通には時は直線と考へられる。

あつてある。

山田

日本文化

時に於ては對立と云ふものはない。併し時は瞬間から瞬
 へと變り行くことを考へる。併し何処までも前後に關係な
 く單に瞬間が瞬間へと云ふならば、時と云ふものも成立せ
 せない。時の現在に於ては、過去は既に過ぎ去つたもので
 ありながら、まだ過ぎ去らないものであり、未來は未だ來
 ざりぬものであるが、既に現れて居ると考へなければなら
 ない。然らざれば、時と云ふものは考へるべきでない。瞬間から瞬間
 へと考へるものは、かゝる時の形式に於て、現在を極小とす
 るにとりよつて考へるべきである。かゝる意味に於ては、
 時は空間的に考へるべきでない。併し時に於ては、すべ

四三三

日本文化

てが溶されて行く^{のいある。}何処まで空間的と考へても、すべてが一
 つの時子^の於てあると考へられ^るかぎり、眞子物と物との對
 立と云ふことはない。~~従つて~~従つて働くと云ふことは
 ない。物と物とが相働く世界、力の世界と云ふのは、何処まで
 も時間的なると共に空間的、何処まで空間的なると共に時
 間的な世界をなすはならない。時間と空間との矛盾的自
 己同一の世界をなすはならない。^{力の世界}於て物と物とが相
 働くと云ふことは、^{と云ふ}ことによつて一結果を述べてと云ふこと
^{一面は}物と物との對立が否定せられて行くことなすは
 ならない。併し^{一面は}それは^{又一面は}逆子空間^の於て物と物とが對立す

又一面は

了ニとてなけ水はなすない。故に力の世界に於て、空間的
 了と云ふことは、時を於てそれが一となつて行くことな
 け水はなすない。力が亡び行くこと、生れること、生れるニ
 とは、^此亡び行くことなけ水はなすない。物理学者は物理的
 世界に於て時間空間の矛盾的自己同一として、種々な物理
 現象を物理的空間の変化と考へるのである。物と物とが相
 働くことによつて変へ行く現実の世界は何処までも時間
 的なること共に空間的となけ水はなすない。時間的過程
 として、眞の對立と云ふものは考へるに値しない。私がか
 世界を場所矛盾的自己同一的场所と不辯證法的一般者と

X 時間空間の相互矛盾的對立は、^此世界の矛盾的自己同一的
 変化から考へるべきである。

かと言ふ所以である。私の場所と言ふのは唯物を並へた空間と言ふ如きものを意味して居るのではない。
 物質的世界と言ふのも、右に云つた如く既^に空間^時間の
 矛盾的自己同一の世界をなすべからず、多と一との矛盾
 的自己同一の世界でなければならぬ。時間空間の相互
 補足性と云ふのも、^{世界}矛盾的自己同一を意味するもの
 である。併し物質的世界と言ふのは、かゝる世界の何処までも
 空間的方向を考へ^たるものである。考へ^たる^否考へ^たる^たも
 のと言ふのではない。かゝる世界はその多的對立の方向に
 於て物質的であるのである。時は單に相對立するもの結合

何処までも

併し物質的世界とは

西川

といふ以上は独自性主有せたい。多の一の世界であつて、
 一の多の世界ではない。世界は何処までも唯多の一として
 動いて行く。かゝる世界の何処までも矛盾的自己同一的
 動き行く形は物理的法則であるのである。時は單に相對立
 するものの結合以上の独自性主有せたいが故に、かゝる見
 方からは、世界は何処までも同一に世界の繰返すと考へる。此
 古典的物理学に於ける様は物質の不變力の不滅が信せら
 れ、ラプラスの様は未來の決定が計算せよと云つて未來
 が無豫知できると考へる。此は世界の機械論的である。併し
 世界は何処までも唯多の一として考へる。考へる。考へる。

此のことは、^{単なる}世界と物との對立の世界と考へること
 である。眞の物と物との^相働く世界を考へることではない。眞
 の物と物とが相働き矛盾的自己同一として自己自身から
^{兼動}動する世界は、個物相互限定の世界でなければならぬ。
 世界の底に單なる多を考へることでもなければ、單なる一
 を考へることでもない。世界を^{時間的}空間的に考へることでもな
 ければ、^{時間的}時間的に考へることでもない。何れも^{時間的}相對立す
 るものの相互否定と^{物と物とが}相働くと云ふことは、上下云ふた
 如く^{その二}相^働が世界となることではない。自己が世
 界となることによつて何れも他を否定すると云ふこと

X (働くものは時と於て先立つもの、世界と於て時の位置を占めるものがある)。

日変化

とでなければならぬ。自己が世界となつと云ふことは、
^{何処までも}何処までも對立するものの統一として、^{自己が}時となつと云ふことではな
 ければならぬ。何処までも個物的なつものは何処まで
 も時間的なるものでなければならぬ。併し一つのものが
 世界となつと云ふことは、又上云つた如く何処までも
 一が自身を否定し行くことではなければならぬ。時が何
 処までも對立するものの結合として何処までも相對立
 するものを統一し行くことは、時が時自身空間となり行くこ
 とであり、時が時自身を否定し行くこと、時が消え行くこと
 でなければならぬ。何処までも個物的なつものの相互限

相互限

日本文

定、個物と個物とが相働くと云ふことは、物が消え行くこと
 から生れると云ふことではなけ水はなすない。生が死であり
 死が生であると云ふことではなけ水はなすない。多は何処ま
 ても一の多として無でなけ水はなすない。一は何処ま
 ても一の多として無でなけ水はなすない。故に限定
 するものなき限定、絶対無の自己限定と云ふ、有即無、無即有
 である。か、了多と一との絶対矛盾的自己同一として有る
 ものは、^{自体的}何処までも絶対的の自己限定として、^{全体的}何処までも決
 定的でなけ水はなすない。現実として決定せし水た世界の
 形は過去の過去から因果必然的に決定せし水たものとして

×有は何処までも有でなけ水はなすない。

四三三三三

て何処までも動がするべからざるものではない。
 我々の自己もかゝる世界の自己形成から生れるのである。
 併しそれは同時に絶対的多の一として、何処までも個物
 相互限定の世界、個物的多の世界でなければならぬ。決
 定せられた現実の世界は何処までも多と一との矛盾的自
 己同一として決定せられたものとして、何処までも否定せ
 られ行くもの、変り行くものでなければならぬ。故に作ら
 れたものから作るものへと云ふ、形が形自身を限定する
 と云ふのである。世界は單に個物的相互限定の世界であり
 且つ、~~機械的世界ではない。~~ ^の世界として機械的世界ではない。

又
 單に全体的一の世界一の多の世界として非合目的で
 もない。多は何処までも多、一は何処までも一として絶對不
 宿的自己同一的^的自己自身を~~非~~限定する世界は自己
 自身を形成し行く世界創造の世界をなけねばならない。我
 くはかゝる世界の個物として創造的世界の創造的要素で
 あるのである。

我々の~~我~~於てある此歴史的現實の世界は單に多から一へ
 として機械的^的の考へられた世界ではない。又單に一から多
 へと一として合目的^的の考へられた世界でもない。單に機械的
 因果の世界ならば生命と云ふものすら考へられぬ。又一

四三川

の多として合目的と考へても、我々が個物的に働くと言
 ふことは考へる水ない。全体的一の自己形成として、世界は
 唯生物的生命と云ふものが考へる水ない。過ぎない。製作^{自由}
~~非水ものは存在自由~~と云ふものはない。製作^{即ちホイエニス}と云ふものは
 ない。此歴史的現実の世界は我々がそこから生水そこへ死
 に行くのみならず、我々が此処に物を作り、作ることによつ
 て作る水て行く世界でなければならぬ。我々が物を作
 ると云つても、世界の外から世界主動^{かまざるにか}がすると云ふのではな
 い。我々は歴史的社会的に生水、技術的に物を作り、作ること
 によつて自己自身を作り行くのである。作る水たものは私

四三三三三

子よつて作らねたものでありながら、何処までも客観的と
 して私と對して表現的立つものであり、逆は表現的と私と
 動かすものである。私のみならず他人をも動かすもので
 ある。歴史的世界に於ては、印度やギリシヤの古代民族の
 作つたものも我々現前して居るのである。我々は之から
 動かされるのである。それ等は尚歴史の現在に於てある
 のである。生物の本能的动作は全体的一としての世界の合目
 的的形成から考へるであらうが、ホモ・ファールベル
 として人間の行動は何処までも作らねたものから作るも
 のへと、多と一との絶対矛盾的自己同一世的世界の自

四三三三

己形成なりとして成立するのでなければならぬか、
 世界の個物的多として我々人間はホイエシス的であり、作
 りて作るものとして、その極限を於て我々は何れも
 自由であるのである。絶対矛盾的自己同一的世界の個物多
 として、我々は自由意志的であるのである。
 私^{以上述べた如く、}は存在の如く、^{を分析して、}歴史的現実の世界^{歴史的現実の世界は}此の如きものでな
 ければならぬ。然らざれば歴史的現実の世界と云ふもの
 は考へられぬ。然るに^{考へる。}普通には現実の世界と云ふ
 ものを、或は機械論的、或は合目的論的、現実を否定
 した立場から現実を説明せうとする。考へられぬものから

山田川

日本文化

考へるもの主説明せうとするのである。私ばかりの説明を拒むものではなく、逆多と一との矛盾的自己同一の世界は一面と何処までも機械論的の考へる世界であり一面と何処までも合目的論的の考へる世界をなす。併し我々の歴史的现实の考へる世界から我々の居る世界から我々の居る世界を主観主義的の考へるのではない。唯人間否定的の考へる世界の客観界と云ふものは、何処までも人間と對立的の考へる世界

四三三三

のであつて、却つて主観主義を脱したものではない。眞の客
 観非難的世界と云ふのは、我々の自己を越えて、逆子之を包
 むものでなければならぬ。我々の自己を以てその個物多
 とせず世界をなせばならぬ。此意味に於て私は徹底的
 客観主義者である。現実が現実を越えつと云ふは不可能と
 云はれつてあつた。現実^{併し歴史的}は單に決定したものである。はな
 ざ水は唯考へる水たもので非^{眞の}現実ではない。主知
 主義的立場から^は現実と云ふものが然考へられたのである。
 眞の現実是我々を包み我々の生命を迫るものでなければ
 ならぬ。我々の生か死かの決まらぬものでなければならぬ。

日本文化

ければなすな。歴史的身体的な行為的自己が成立し得た
 か否や、そとと我々は眞の現実と接して居るのである。歴史
 的現実とは、いつもか、矛盾的自己同一でなければなら
 ない。我々が個物的なればな程、かゝる現実と對面するの
 である。我々はかゝる世界の個物的多として、~~相對矛盾的自~~
~~己向十は對するものと~~思惟的であつたのである。考へ
 と云ふこと、その事が、現実と合致せぬをなすな
 い。我々が考へると云ふことが、歴史的^{操作}的~~對照~~であり歴史的事
 実であるのである。

私が従来論じた様に、個物の相互限定と^は表現

西田三木

日本文化

作用的と云ふことであり、個物の相互限定の世界と云ふのは表現的の自己自身を形成する世界でなければならぬ。機械的の相衝く原子の如きものは自己自身の内から自己を限定する個物ではない。それは唯他から動かさるるものである。有機体としての細胞と細胞との関係に於ても、個物の相互限定と云ふものは考へずにはない。細胞は何処までも自己自身の内から自己自身を限定する個物ではない。それは尚何処までも全体の一部といふ性質を脱したものでない。個物と個物との相互限定とは、私と汝と我云ふことでなければならぬ。ライプニッツの考へは、~~主知~~主知

的であつて、モナドと云つても、私の矛盾的自己同一の世界
 の個物的多^至選^至せないが、知覚とは多主一と於て表^出現する
 ことと外なるないとい^い彼の考は個物相互限定の世界の根柢
 と觸れたものでなければならぬ。そのと始めて意識の世
 界といふものが成^成立するわけがあり、世界が意識的であり、意
 識的行為といふものが成^成立するのである。ライプニッツでは
 個物的多といふものが實在と考へられ居るが、それでも
 モナドは世界を映すと共^共に世界のペルスペクティブの一
 極観念であるといつて居る。幾^幾か、この多と一との矛盾的
 自己同一的關係は何処までも徹底的に示^示すなければならぬ。

日本文化

四三三三

世界が多の一であると共に何処までも一の多をなけねば
 ならない。我々は此世界から生れるのである。私は個物と云
 小ものが先づあつて、そこから世界が^{成立する}と云ふのでは
 ない。孤立的な私とか汝とか云ふものがあつて、その結合が
 社會が出来ると云ふのではない。矛盾的自己同一として
 無限の自己自身を形成する世界の契機として個物的なと
 云ふものを考へるのである。私と汝といふ我々の自己も、
 歴史的社會的世界の自己形成の契機として^{歴史的}成立するのである。我々の自己は矛盾的自己同一的な社會の自己形成
 から形成せられるのである。歴史的社會的に生れるのである

日本文化

了。故に私は動物の本能的世界に於ても、本能と云ふものが
 単に機械的でもなく、生理的でもなく、如何に~~或~~朦朧が
 其も朦朧であつて~~意~~意識的であるかぎり、それは個物的な
 を認めらるのである。個物が世界を映すことによつて欲求的
 であつたのである。而して我々の自己と云ふもの、^{もの}歴史的世界の
 外に遊離して居るのでなく、^{歴史的}身体的に此世界から生れ
 るのである。我々の自己は本能的なるものを否定し之を越え
 と考へる水と共に^{歴史的}何処までも之を脱することにはできな
 い。種々^{歴史的}人間の生命は動物の生命を一極として有ち、動
 物の生命は人間の生命を一極として有つと云ふ所以であ

四山用紙

歴史的世界の自己形成即ち

了。歴史的生命の兩極と云ふことができた。その根柢を一を考へることもできず、多きを考へることもできない。矛盾的

自己同一の世界は、何処までも表現的、自己自身を形成す

る世界でなければならぬ。作られたものから作るものへ

の世界でなければならぬ。歴史に於ては与へられたもの

は作られたものと云ふ所以である。現在は何処までも決定

せられたものでありながら、否定せらるべく決定せられた

ものであり、現実はいつも現実を越えて居る。現実は無價的

自己同一として自己自身^{自身}の^{何れでも}ゆから自己^{自身}を越え^て行くのである

る。井田の物理学に於ても井田博士のブローイ^{とは}は決^ての^事

日本史
今日の

有

微視的物理学と主観的物理学

如^云ト云^云ハ、プリズム^云分析の前^云ト七色が白色の中^云トあつた
 か^云トリ小^云問^云ト對^云して、我^云々は然^云リト考^云へる併^云しそ^云れは唯
 実験^云トよ^云つて我^云々が知^云り得^云る可能性^云ト一^云つたのであ
 る^云物理的^云操作^云を離^云れて物理的^云实在^云界^云と云^云ふもの^云があ^云るの
 では^云ないか、^云意味^云ト於^云て、物理的^云实在^云の世界^云も歴史的^云实在^云
 在^云の世界^云の^云双^云ト包括^云せ^云ら^云れるのである。而^云してそ^云れは右^云ト
 も云^云つた如^云く世界^云を主観的^云ト見^云ること^云では^云なく却^云つて何
 処^云までも客観的^云ト物の^云眞実^云ト行^云くこと^云では^云なく却^云つて何
 い^云矛盾^云的自己^云同一^云トして世界^云を表現^云的^云ト自己^云自身^云を形成
 する^云と考^云へることは、世界^云を主観的^云ト考^云へること^云では^云なく、

日本文化

四三三

× 形は歴史的世界の個物的多として

我々却つて我々の思惟^へが起つといふ世界を考へ
 ること^{ありつてある。}に在り^{あり}な^るが、我々の思惟^{作用}と云ふのも、
 現^表的^裏の自己自身を形成する歴史的世界の個自己形成の^{性質}性^質
 質^を有つたものでなければならぬ。我々の^{精神}精神行為は
 行為的直観から起るのである。絶対矛盾的自己同一の世界
 の個物として何処までも自己が世界を映すと共に自己が
 世界の一観念であると云ふことより起るのである。我々が
 ポイエシス的に物を見る所、我々が^{の自己}が^{考へる}が^水が^へと^りい^ふ
 所、そこは歴史的世界の自己形成があり、客観的世界と云ふ
 ものが^{あり}見^える^水のである。直観と云ふのは非思惟的と云ふ

日本文化

三と
 ではなく、世界が矛盾的自己同一的と自己自身を形成する
 所~~が~~行為的直観的であるのである。我々の行為がそれ
 からそとへと考へられるのである。操作~~による~~よつて直観の性
 質が異なるのであるが、科学的実験と云ふのも、かゝる意義
 に於ては行為的直観的であるのである。今此書に於て此等
 の問題を深入りする事はできない。吾細は私の「哲學的論
 文集」~~に~~就いて見ると、人ことまじむ。此処には唯私か此書
 に於て云は~~んと欲すること~~思ふ所のものの根拠として、私の眞実性と
 根本的思想の要~~を~~述べてたの~~に~~過ぎない。一般の讀者には
 或は理解

22
下

以下少し下ケル但ニ本文ノ活字ト同大

母知の如く、アリストテレスは形而上学ニ於テ、原因と云
 小ものが四種ニ考へらるると云ふ。而シテ、
 力因、目的因、^{（此ニ合ケテ居ル）}今日の科学では、^{（主トイフ）}動力因と云ふものが
 考へらる。目的因と云ふ如きものも、^{（全然）}無考へらるないで
 もないであらう。併ニ形相因と云ふ如きものも至つては、
 単ニ主観的と考へらる。たけである。併ニ歴史的現実^{（主）}と云
 小もの^{（主）}は、^{（主）}果体的それ自身から動き行く^{（主）}真々の具体的
 實在と考へる。時^{（主）}現實の世界の^{（主）}有形と云ふものが實在的
 ものでなければならぬ。それは我々^{（主）}から^{（主）}投射したもので
 はなくして、我々の自己と云ふもの^{（主）}は、^{（主）}世界の自己

日本文化

現実の形として

形成の形成作用として實在働くするのである。我々の身体と云
 小ものも、かゝる意味に於て形成せう形成するものである。物理
 的實在と考へるものも、我々の身体的操作を離れたもので
 はない。何処まで行つても、そこかゝるそこへてなければな
 ない。（思惟の客観の内容）我々の意味と云小ものも、歴史的社會的の形成せう水
 了ものでなければならぬ。歴史的社會と云小ものは、形を
 有つたものである。否、それ自身が力の矛盾的自己同一的
 な一つの形成作用である。但、質料因かゝ離された形相因
 と云小ものは、抽象的である。主観的たると過ぎない。私
 の客観的形相因と云小のは、所謂形相が質料を質料が形相

×即ち歴史的生産作用を云ふのである。

を限定し、所謂形相と質料との矛盾的自己同一として自己
 自身を形成し行く形成作用を云ふのである。私の所謂
 一との矛盾的自己同一としての辯證法的な形を云ふの
 である。單なる形相は抽象的觀念^{に過ぎない}如く、單なる質料^も
 は何物でも^{ない、無に過ぎない。}ないギリシヤ哲学に於ても、單なる質料は無と
 考へられた。主体が環境を環境が主体を限定し、主体と環境
 との矛盾的自己同一として自己自身を形成し行く世界の
 形、即ち我々がハイエシスの^物見、見ることか、働く形を云
 ふのである。ヘーゲルに於ては、主体的方向、即ち私の全体的
 一といふ方向^{が基礎となつて}居るが、ヘーゲルの辯證法的^な形

日本文化

辯證法

日本名

イデーと云ふのも此の如き形である。かゝる立場から其
 亥ヘーゲルが自然をイデー・パウセル・ジッヒと考へた如く、
 全体的な否定した^二の^一世界として、單なる動力因^的世界
 と云ふものを考へ得るであらう。歴史的世界が同時存在
 と考へられ、時動力因^的となる。動力因と云ふのは、形成
 的因の一方の極限として考へる事ができる。ポイエシス
 と云ふものを中心として、實在界と云ふものを考へる時、斯
 く考へなければならぬ、世界成立の理由としてライプニ
 ツの充足原理と云ふものも、右の如き意味に於て形成^的因
 と考へべきであらう。それは動力因と目的因と一と成つた

なければならぬ。

四三三

ギリシヤでは
此語は廣く
深い意味を
用ゐるが
かと思ふ。

630)

ものと云ひ得るであらう。

私は^{居る}ポイエシスといふギリシヤ語を用ゐるが、ポイエ

シスとは物を作ることである。例へば大工が家を建てる二

となど、ポイエシスである。私は^{併し此語を}廣く深く歴史的作為と云ひ

如く、意義を用ゐて居るのである。アリストテレスが水鳥の

足に蹠が^{できて}来ると如き場合にも、自然が作ると^{云ひ、故に}再^{ポイエーといふ}語を

用ゐて^{居る}作為と云ふ如き語は主観的のみ考へる

恐ろしく、學術語として姑くポイエシスといふ語を用ゐ

て居るのである。蹠が^{できて}来ると云ふ^{如き}小ごとと、家を建ると云

ふ小ごととを一緒に考へるは、無造作と云は^{過ぎ}水である。私

△無論ギリシヤのポイエシスには歴史的意義はないが、私は此語によつて
その背後に深い歴史的思考を考へて居るのである。大工が家を建て
ると云ふことも、歴史的世界に於て歴史的制約の下に成立する事柄として、
歴史的作為であつたのである。

これは、
ギリシヤの
歴史の
研究に
必要
な
語彙
の
一つ
である。
私は、
この
語を、
廣く
深く
歴史的
作為
として
用ゐる
が、
大工
が
家
を
建
てる
二
と
な
ど、
ポ
イ
エ
シ
ス
と
い
ふ
語
を
用
ゐ
る
が、
こ
の
語
は、
主
観
的
の
み
を
考
へ
る
に
止
ま
ら
ず、
歴
史
的
の
制
約
を
考
へ
て
居
る
こ
と
を
考
へ
る
に
よ
り、
こ
の
語
を
用
ゐ
る
こ
と
が、
歴
史
的
の
制
約
を
考
へ
る
こ
と
に
等
し
い
こ
と
に
思
ふ。

以上
9/15/07

はそれと對して多くの云ふべきものも有つて居る。併し今
 此処にその問題を入ることはできない。例へば歴史的自己形
 成せしめるものは、全体的一と個物的多との矛盾的自己同
 一的な形成せしめるのである。あり、前者は全体的一の方向
 に向つて、^{全体的な方向に}後者は釋個物的多の方向^{環境的な方向に}に向つて考へる。苟も
 歴史的世界が出来たものは、かゝる相互する両方向の矛盾
 的自己同一性を^由なすはなない。種々なるポイエシスは此
 立場からいなければならぬ。

以上少し下で活字本を同大

日考方化